2007 年世界柔道選手権大会における外国人選手の競技分析
ー 2005 年との比較ー

石川美久・小俣幸嗣

Analysis of foreign players on world Judo championships in 2007
− The comparison with 2005 −.

ISHIKAWA Yoshihisa, KOMATA Koji

1. 緒言

世界の柔道競技では、これまで高い競技力を示す国が限られていた。近年は新しく、中央アジア、南米地域にも強豪国が台頭している。これはトップ選手の柔道のスタイルが多様化していることを意味する。これらの選手特有の組み方や施技傾向は、日本人選手が敗退する要因の一つと指摘されている。

このような状況で、外国人選手の組み方や技術的特徴を明らかにすることは、世界柔道の傾向を把握することにつながり、国際競技力向上のために有益となる。

そこで、本研究は、世界柔道選手権大会（以下、「世界選手権」と略す）を対象に外国人選手の組み方を中心とする競技内容を明らかにし、外国人選手対策のための資料を提示することを目的とする。

2. 研究方法

本研究で対象とした試合は、2005 年カイロ世界柔道選手権大会（以下、「カイロ大会」と略す）と 2007 年リオデジャネイロ世界柔道選手権大会（以下、「リオ大会」と略す）の 2 大会である。

試合映像は、全日本柔道連盟強化委員会情報戦略部が会場で撮影したものを用いた。さらに、正確さを期すため、大会の全試合結果が記録された IJF 公式記録を参照した。

本研究の分析項目は、技の分類、得点の獲得、施技直前の組み方である。

技の分類は、講道館の投技である手技、腰技、足技、真捨身技、横捨身技の 5 分類についての施技数を検討した。

得点の獲得は、「一本」「技あり」「有効」「効果」「得点なし」について、試合者が獲得したポイント数を集計し検討した。

施技直前の組み方は、施技直前に両手で柔道衣を握っている場合（以下、「両手組み」と略す）と、施技直前に片手で柔道衣を握っている場合（以下、「片手組み」と略す）と、施技直前に両手とも柔道衣を握っていない場合（以下、「握っていない」と略す）の 3 分類に分けて検討した。

対象とした試合数は、カイロ大会 741 試合、リオ大会 933 試合である。施技の映像は、試合者全ての動作が撮影されているものを分析対象とした。分析施技については、投げる意思を持って掛けたと思われる施技全てとし、偽装的な攻撃として、「指導」の罰則を宣告されたときの施技は除いた。また、公式記録の技名称が明らかに異なる場合は、筆者が訂正した。

統計処理においては、技の分類、得点の獲得、施技直前の組み方の分析項目について、クロス表を用いて、χ^2 検定を行った。さらに、5%水準の有意差が認められた場合、期待値と実際の頻度の差を検討する残差分析を行った。

3. 結果および考察

3.1. 技の分類

全ての施技を、講道館の投技である手技、腰技、足技、真捨身技、横捨身技の 5 分類について検討した。

2 大会における技の分類の比較を表 1、表 2 に示した。男子においては、リオ大会で手技が減少し、真捨身技、横捨身技が増加した。女子においては、リオ大会で手技が増加し、腰技が減少した。男女ともに共通した増減はみられなかった。これまでに、手技や真捨身技は、近年の国際大会で増加傾向にあることが報告されている[1,2,3]。現在では、手で直接脚を狙う技や体を捨てながら施技する技が外国人選手の特徴といえるだろう。

本研究の男子において、手技の減少が認められたが、全施技の 40％を占めている。さらに、真捨身技、横捨身技が増加していることからも、これらの技が外国人選手の特徴であることがうかがえる。

女子では、手技が増加し腰技は減少しているが、それは後述する組み方が影響していると考えられる。手技の増加は、離れた状態から組み際に施技しやすい双手刈が増したことが要因の一つと考えられる。一方、腰技は比較的両手で組み合わなければ施技することが困難である。したがって、組み合わない傾向が腰技を減少させた要因と考えられる。

3.2. 得点の獲得

柔道の得点は、優位性の順に「一本」「技あり」「有効」「効果」の 4 つに分類されている。これらを得点ごとに 2 大会の比較検討を行った。さらに、上記のポイント以外を「得点なし」として集計した。

2 大会における得点の獲得数の比較を表 3、表 4 に示した。男子においては、リオ大会で「技あり」が減少した。女子においては、リオ大会で「一本」「効果」に減少がみられた。男女共通して、リオ大会で「得点なし」が増加した。国際柔道連盟は「一本」を目的とする“ダイナミック柔道”を推奨している。しかし、リオ大会で男女ともに「一本」「技あり」の高得点に減少がみられたことは、外国人選手の柔道がそれから遠ざかっていることを示している。

表 1　技の分類の比較（男子）

	カイロ			リオ		
技種類	施技数（回）		割合（%）	施技数（回）		割合（%）
手技	1563	+	43.8	1821	−	40.7
腰技	230		6.4	267		6.0
足技	1027		28.8	1297		29.0
真捨身技	501	−	14.0	718	+	16.0
横捨身技	250	−	7.0	370	+	8.3
合計	3571		100	4473		100

+：5%水準で有意に大，　−：5%水準で有意に小

表 2　技の分類の比較（女子）

	カイロ			リオ		
技種類	施技数（回）		割合（%）	施技数（回）		割合（%）
手技	760	−	33.8	1271	+	39.1
腰技	284	+	12.6	272	−	8.4
足技	872		38.8	1198		36.8
真捨身技	108		4.8	185		5.7
横捨身技	224		10	327		10.0
合計	2248		100	3253		100

+：5%水準で有意に大，　−：5%水準で有意に小

3.3.　施技直前の組み方

組み方は、試合の展開に影響する。柔道の組み方は、「標準的」組み方として国際柔道連盟試合審判規定に定められている[4)]。外国人選手は、両手で柔道衣を握らず、組み合わないことが指摘されている。そこで、施技直前の組み方として「両手組み」「片手組み」「握っていない」の 3 分類に分けて検討した。

2 大会における施技直前の組み方の比較を表 5、表 6 に示した。男女ともにリオ大会で、「両手組み」が減少し、「片手組み」「握っていない」が増加した。

表 3　得点の獲得の比較（男子）

	カイロ			リオ		
技種類	施技数（回）		割合（%）	施技数（回）		割合（%）
一本	185		5.2	253		5.7
技あり	141	+	3.9	135	−	3
有効	199		5.6	211		4.7
効果	90		2.5	89		2
得点なし	2956	−	82.8	3785	+	84.6
合計	3571		100	4473		100

+：5%水準で有意に大，　−：5%水準で有意に小

表 4　得点の獲得の比較（女子）

	カイロ			リオ		
技種類	施技数（回）		割合（%）	施技数（回）		割合（%）
一本	105	+	4.7	103	−	3.2
技あり	61		2.7	90		2.8
有効	110		4.9	173		5.3
効果	97	+	4.3	75	−	2.3
得点なし	1875	−	83.4	2812	+	86.4
合計	2248		100	3253		100

+：5%水準で有意に大，　−：5%水準で有意に小

表 5　施技直前の組み方の比較（男子）

	カイロ			リオ		
施技直前の組み方	施技数（回）		割合（%）	施技数（回）		割合（%）
両手組み	2221	+	62.2	2348	−	52.5
片手組み	1145	−	32.1	1742	+	38.9
握っていない	205	−	5.7	383	+	8.6
合計	3571		100	4473		100

+：5%で有意に大，　−：5%水準で有意に小

表 6　施技直前の組み方の比較（女子）

	カイロ			リオ		
施技直前の組み方	施技数（回）		割合（%）	施技数（回）		割合（%）
両手組み	1460	+	64.9	1953	−	60.0
片手組み	661	−	29.4	1062	+	32.7
握っていない	127	−	5.7	238	+	7.3
合計	2248		100	3253		100

+：5%で有意に大，　−：5%水準で有意に小

石川らは、外国人選手の男子は組み合わない傾向にあることを報告している[1]が、本研究では、女子においても組み合わない傾向が確認された。外国人選手の組み合わない傾向は男女ともにいえることであり、それはさらに進んでいることが示唆された。

4. まとめ

本研究は、世界選手権を対象に外国人選手の競技内容を明らかにし、外国人選手対策のために資料を提示することを目的に行った。

そして、以下のことが明らかとなった。

1）技の分類は、リオ大会で男子は、手技が減少、真捨身技、横捨身技が増加した。女子は、手技が増加、腰技が減少した。

2）得点の獲得は、リオ大会で男子は「技あり」が、女子は、「一本」が減少した。

3）組み方においては、リオ大会で男女ともに両手で組み合わず、「片手組み」や「握っていない」状態から施技する傾向へと変化した。つまり、外国人選手は、組み合わない傾向が増している。

カイロ大会からリオ大会の期間はルール改正はなく、同じような選手たちで競われている。しかし、施技や得点、施技直前の組み方に変化がみられた。つまり、外国人選手の傾向は、ルールに関係なく常に変化していることが示唆された。

6. 文献

1） 石川美久他（2009）世界柔道選手権大会における外国人選手の競技傾向－ 1995 年と 2005 年の比較－．柔道科学研究，14：14-19.

2） 中村勇他（2002）1995 ～ 1999 年世界柔道選手権大会の競技内容分析：勝利ポイントと勝利ポイント獲得技による比較．武道学研究，35(1)：15-23.

3） 中村勇他（2004）2003 年世界選手権の競技分析－ 1995 年～ 2001 年大会との比較－．柔道科学研究，9：1-6.

4） 財団法人全日本柔道連盟（2004）国際柔道連盟試合審判規定．共立速記印刷株式会社.